

# 私のはんせい記

## ～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

### ● 繙承したい伝統工法 木舞壁

伝統的日本建築で一般的に施工されてきた壁の工法に木舞壁がある。

城郭や社寺、武家屋敷や土蔵、町屋や農山漁村の民家まで、あらゆる建築の壁に採用されてきた。日本各地に多くのこの工法で造られた建物が残るだけでなく、第二次大戦以前の殆んどの家屋が木舞壁で造られ、今でも大都市を除く全国でこの伝統工法が継承されている。

木舞壁は日本建築文化の中核をなす伝統工法である。ぜひとも継承したい。

この特徴は以下のようになる。

第1に、木舞壁は自然素材で造られ、人体に優しい健康材料である。里山に自生する竹を割り裂いた木舞を芯材とし、よく絡み付く田んぼの下のほうの泥土など、有機質を含んだ粘り気のある泥に長さ6cm程の藁スサやシロを混ぜ、足踏みして、よく練って使用する。木舞壁は石油化学製品や接着剤などの新建材で造った家の様にシックハウスにはならない。

第2に、木舞壁建築は東京や大阪を除く地方都市では、地元で得られた素材を地元で消費し、輸送コストやエネルギーを削減する「地産地消」の省エネ工法である。新建材で造られる住宅に比べて輸送コストとエネルギーが大幅に削減されることは言うまでもない。

第3に、土壁や珪藻土、漆喰などで仕上げられた木舞壁は、調湿機能があり、湿度が高くなると湿気を取り込み、空気が乾燥すると壁体内から水分を放出し、結露が発生しない。

除湿機や加湿器などの家電製品に頼らなくても快適に室内環境が保持できる。

第4に、日本の木舞壁は、昼夜の寒暖の差が激しい中央アジアから中近東砂漠地帯の伝統的建築素材である「日干し煉瓦」と同じ物性を持ち、コンクリートよりボーラスで分厚い壁体は断熱性を持ち、蓄熱・蓄冷機能もある。

土蔵は太い柱・桁・胴差しの貫構造の木舞壁の外側に屋根から外壁面まで縦横10cm角の藁縄格子をスッポリ被せ、藁スサを混ぜた泥団子を詰込み、屋根から壁まで30cm厚さで構成される。この建築様式は室内温度を標準化し安定させる。

収納を目的とする蔵以外に、都市の防災に備えた蔵座



木舞壁の工事写真 山口県柳井の家

敷や見世蔵の居室・室内は、夏は涼しく、冬は火鉢程度の暖房でもほんのり温かみがある。日本特有のパッシブソーラー・ハウスである。

第5に、厚さが30cmほどある土蔵は耐火性に優れ、江戸の大火灾に耐えてきた。

第6に、耐久性に優れ、川越など見世蔵造りの歴史的建造物群は長く使われている。

第7に、土蔵は地震や津波にも強い。巨大な地震と津波にあった三陸の街では、木造家屋や鉄骨建造物は流されて瓦礫となっていたが、土蔵は流されずにしっかりと存在していた。

東京には施工できる職人は見かけなくなったが、地方では木舞壁を施工できる職人は残り、建築を知っている普請道楽の施主は、この工法を希望する場合も多い。

極めて優れた工法ではあるが、施工に時間がかかる。木舞壁で新規に家を建てる場合、基礎工事を始める前から下塗り用の泥土を手配し、棟上げ後、木舞を組みだし、下塗り後、2カ月、場合によっては一冬、寒気にサラシ、ひび割れを充分発生させたのち、中塗り、上塗りをかける。しっかりした木舞壁を作る為のこの期間が我慢できない都会人にはむかない。手っ取り早く家を手に入れようとする現代人に、木舞真壁の伝統的木造建築工法や技術が受け入れられにくい点はここにある。

質の高い伝統工法を継承していくために建築主の理解と協力が不可欠である。

1998年からメンテナンス部会の下部組織として活動していた「住宅再生分科会」は、2005年に「住宅再生部会」として独立した。「私のはんせい記」では、これまで6回に渡り、初期の「JIA・住宅再生分科会」から「住宅再生部会」誕生までの事を記録した

その後、「住宅再生部会」は鯨井勇部会長、大沢悟郎部会長、宇佐美潔部会長へと引き継がれ、建築家協会の中にあって独創的な活動を展開している。

#### みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。